千 葉 県 八 千 代 市

川 崎 山 遺 跡 k 地 点

－宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２００６

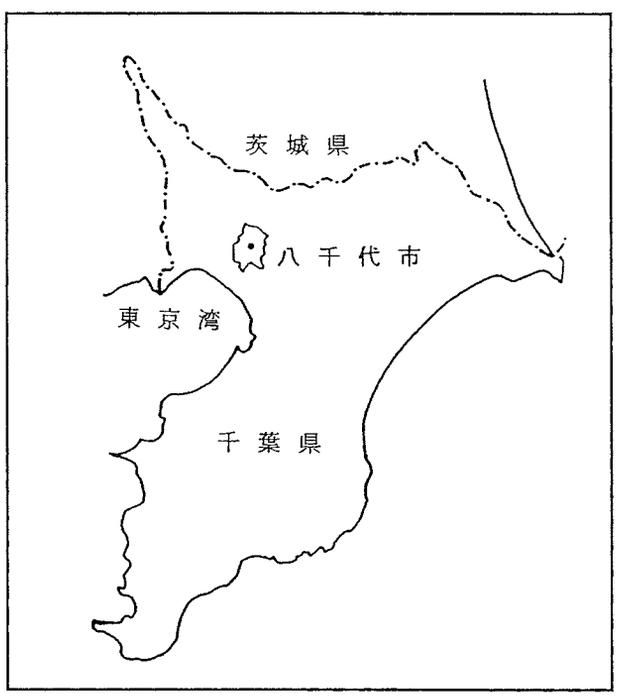
協 和 不 動 産 株 式 会 社

八 千 代 市 遺 跡 調 査 会

千 葉 県 八 千 代 市

川 崎 山 遺 跡 k 地 点

－宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－



2 0 0 6

八千代市遺跡調査会

序　　文

八千代市は千葉県北西部に広がる下総台地の西部に位置しています。下総台地は、印旛沼・手賀沼・利根川など豊かな水源と、一年を通しての温暖な気候を背景として、旧石器時代以来、多くの人々が生活を営んできました。こうした恵まれた自然環境のもと、八千代市においても、旧石器時代以来の多くの人々の生活の息吹が遺跡の発掘調査によって次第に明らかにされつつあります。八千代市は東京より30㎞圏に位置する近郊住宅都市として全国でもまれに見る人口増加で急成長を遂げ、近年においては市内２ヶ所において大学と住宅地がセット開発され、学園都市としての側面もあわせ持つようになりました。このように急速に発展を遂げた八千代市でありますが、市域中央を流れる新川沿いなどには、今なお、豊かな自然が残されています。これからも八千代市は水と豊かな環境を守りながら、着実に発展してゆくことと思われます。

今回ここに報告いたします川崎山遺跡は市域中央の萱田町に位置し、付近には東葉高速鉄道八千代中央駅を中心としたゆりのき台の町並みが広がる、八千代市でも市街化の進んでいる地区に所在します。平成18年２月、この地に宅地造成の計画がおこり予定地内に所在する埋蔵文化財について関係機関による慎重な協議を重ねた結果、現状保存は困難であるとの結論に至り、記録保存の措置として、発掘調査を行うこととなりました。

八千代市内では、これまでも多くの遺跡の発掘調査が行われています。今回の調査では、弥生時代の竪穴住居跡が調査され、多くの成果を得ることが出来ました。本報告書が学術資料としてはもとより、教育資料として、そして地域の歴史に興味を持たれている方々に大いに活用されれば幸いです。また、埋蔵文化財についてより多くの方々の理解を深め、文化財保護についての関心を高めることに寄与できるよう願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から報告書に至るまでの間、ご協力頂いた事業者である協和不動産株式会社の皆さんをはじめ、ご指導、ご助言を頂いた千葉県教育委員会、八千代市教育委員会及び関係諸氏、関係各機関の皆様方に深く感謝いたします。また、発掘調査、報告書作成作業に従事された調査補助員、整理補助員の方々にも深く御礼申し上げます。

平成18年10月31日

八千代市遺跡調査会
会　長　加賀谷　孝

凡　　例

１．本書は、千葉県八千代市萱田町に所在する、川崎山遺跡の発掘調査報告書である。

２．調査は、協和不動産株式会社代表取締役宮本眞澄氏の委託を受け、八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。

３．調査遺跡の所在地、期間、調査原因等は、下記のとおりである。

遺跡名　　川崎山遺跡（ｋ地点）

所在地　　八千代市萱田町字川崎山756

調査期間　2006（平成18）年３月13日～2006（平成18）年３月24日（確認調査〔県費補助事業〕）

　　2006（平成18）年４月10日～2006（平成18）年５月８日（本調査）

調査面積　320㎡/2,339.5㎡（確認調査）

　　170㎡（本調査）

調査原因　宅地造成

４．整理作業及び報告書作成作業は、2006年６月１日～９月30日までの期間行った。

５．本書の編集・執筆は、Ｉ章１節、２節を宮澤久史が、その他を伊藤弘一が行い、宮澤が統括した。

６．出土遺物及び実測図等の資料は八千代市教育委員会で保管している。

７．本書、図１に使用した地形図は、国土地理院発行の25,000分の１地形図『習志野』・『佐倉』を使用した。

８．本書、図２に使用した地形図は、八千代市発行の2,500分の１八千代都市計画基本図（平成13年修正）№19を使用した。

９．各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。

竪穴住居跡　1/80　土坑　１/40　溝　1/100

10. 本書に使用したスクリーントーン表示は以下のとおりである。

炉火床面　　焼土

11. 発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては、関係各機関及びに内外の多くの方々にご指導、ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。（順不同、敬称略）

千葉県教育委員会　八千代市教育委員会　内田武志

目　次

序　文
凡　例
目　次
挿図目次

第Ⅰ章　序　説……1
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……1
　第３節　遺跡の位置と環境……1
第Ⅱ章　調査された遺構と遺物……6
　第１節　弥生時代……6
　第２節　時期不明……8
　　（１）　土坑……8
　　（２）　溝……10
第Ⅲ章　成果と課題……11

図　版

挿図目次
第１図　川崎山遺跡　周辺地形図及び周辺遺跡分布図……2
第２図　川崎山遺跡における遺構の分布……4
第３図　遺構配置図及び基本層序……5
第４図　０１Ｄ……6
第５図　０１Ｄ焼土・炉……7
第６図　０１Ｐ・０２Ｐ・０３Ｐ・０４Ｐ・０５Ｐ……8
第７図　０１Ｍ……10
第８図　川崎山遺跡ｋ地点周辺遺構配置図……12

第Ⅰ章　序　説

第１節　調査にいたる経緯

平成18年２月、八千代市萱田町字川崎山1185-１外の土地について、協和不動産株式会社代表取締役宮本眞澄氏（以下、「事業者」という）から宅地造成工事に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。照会地は市遺跡 No241川崎山遺跡の範囲内であり、過去の隣接地及び周辺部での調査の成果から、本照会地においても遺構が検出される可能性が高いと判断し、市教委は、事業者に対して、「遺跡有り」の回答を行い、開発にあたっては、発掘調査が必要となる旨を伝えた。その後、市教委と事業者の間で確認調査実施の為の協議が進められ、準備の整った平成18年３月13日から遺跡の性格や範囲を知るための確認調査が開始された。

確認調査は、市教委が平成17年度不特定遺跡発掘調査事業として、県費の補助を受けて実施した。期間は平成18年３月13日～３月24日の間で、その結果、弥生時代の竪穴住居跡１軒、時期不明の溝１条、土坑３基を検出した。この結果を踏まえ、千葉県教育委員会の指導の下、市教委は、開発区域の内、170㎡については、引き続き協議が必要と判断し、その旨を事業者に通知した。

確認調査の結果を受け、市教委と事業者との間で再び協議が進められ、埋蔵文化財の現状保存は困難との判断に至り、記録保存の措置として、発掘調査を実施することとなった。このことを受け、市教委と八千代市遺跡調査会（以下、「調査会」と略）と事業者の間で埋蔵文化財の取り扱いをめぐる協定を締結し、更に調査会と事業者間で本調査・整理作業に関わる委託契約を締結した。本調査は、以上の経緯から、調査会が市教委の指導の下、平成18年４月10日から実施することになった。

第２節　調査の方法と経過

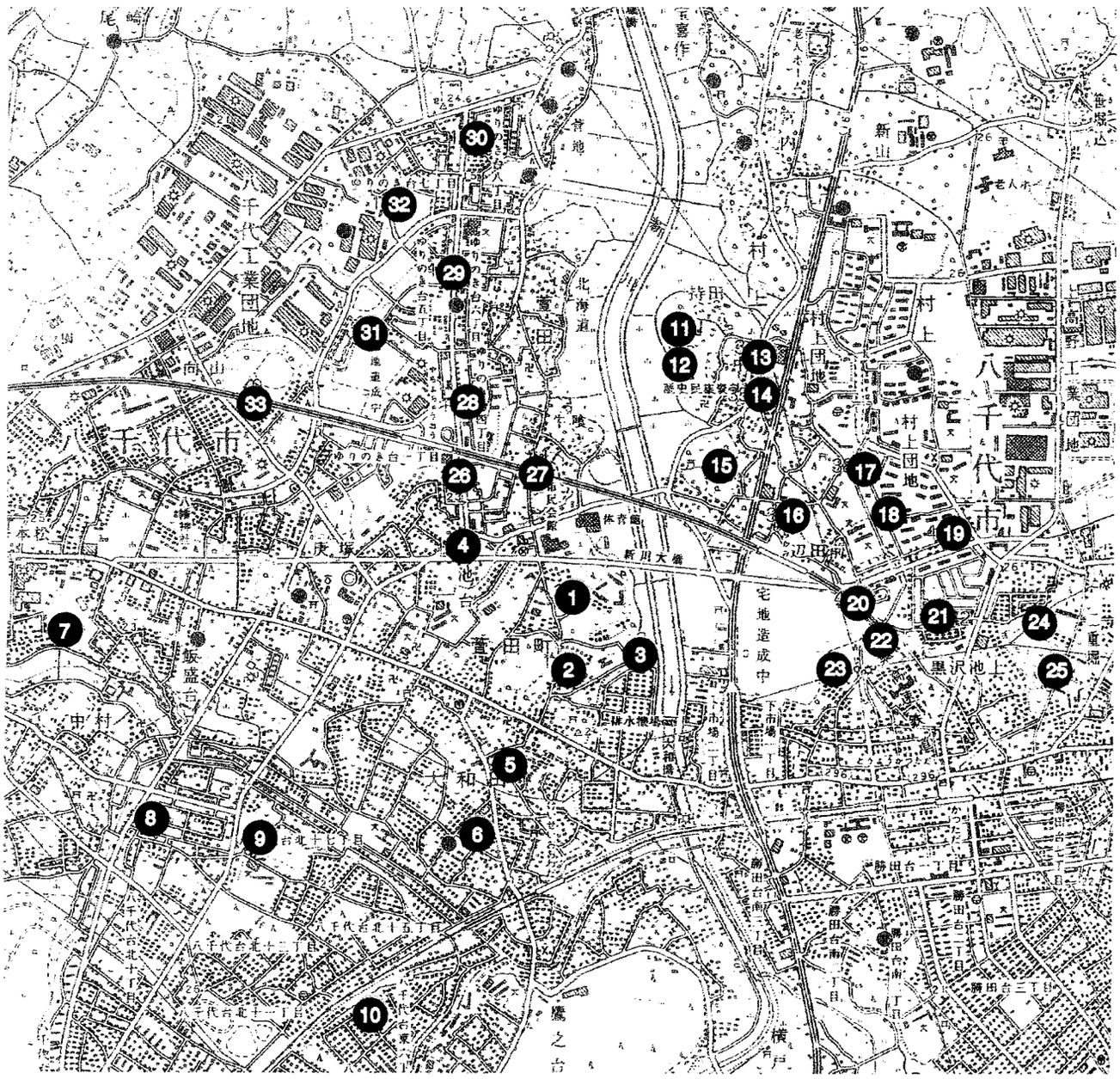
調査は、確認調査の結果から導きだされた遺跡範囲について重機で表土除去作業を行い、表土除去後、ソフトローム層上面で遺構確認作業を行った。検出された遺構については、土層観察用のベルトを適宜設定し覆土除去を行った。調査の進捗にあわせ、写真撮影、図面作成等の記録作業を実施した。撮影にはブローニー判モノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを基本としながら、35㎜モノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを使用した。実測方法としては、公共座標に沿ってグリッドを設定した。設定にあたっては、10m 単位で設定し、各グリッド杭を基準としながら、光波測距儀による実測を中心に従来の遣り方実測を併用した。

第３節　遺跡の位置と環境

川崎山遺跡の所在する八千代市は、千葉県北西部に位置する。八千代市の地形は、印旛沼に西から注ぎ込む新川と支流の神崎川・桑納川・高津川等の河川により、複雑な樹枝状の谷津が発達する台地により形成される。市域の台地は、14～30mの標高であり、東京湾分水界を起点として南西部で高く、北から東にかけて徐々に低くなる。調査地の台地は、新川の低地から13～16mの比高差があり、北側の台地と南側の台地との間に谷津が入り込んでいる。

今回のｋ地点の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡１軒の検出であったが、調査はａ～ｋ地点にわたり実施され、遺跡全体のなかでどのように位置付けられるのか時代ごとに概観してみる。

旧石器時代は、ブロックを１ヵ所検出している。縄文時代の遺構は、陥穴51基・土坑48基が明確なものとして調査され、出土した縄文土器の時期は、早・前・中・後・晩期にわたる。弥生時代は、前・



1.川崎山遺跡　2.上ノ山遺跡　3.上ノ山古墳群　4.池ノ台遺跡　5.小板橋遺跡　6.堰場台古墳　7.一本松前遺跡 8.高津新山遺跡　9.内込遺跡
10.大留入遺跡　11.持田遺跡　12.正覚院館跡遺跡　13.境作遺跡　14.殿内遺跡　15.浅間内遺跡 16.白筋遺跡（根の上神社古墳含む）17.名主山遺跡
18.村上込の内遺跡 19.村上第１塚群 20.村上第２塚群 21.黒沢台遺跡 22.沖塚遺跡 23.沖塚古墳　24.二重堀遺跡　25.黒沢池上・新林遺跡
26.白幡前遺跡 27.上の台遺跡 28.井戸向遺跡 29.北海道遺跡 30.権現後遺跡 31.坊山遺跡 32.ヲサル山遺跡 33.向山遺跡

第１図　川崎山遺跡周辺地形図及び周辺遺跡分布図

中期には、生活の痕跡が見られないものの、後期に至り41軒の住居跡を検出している。古墳時代は弥生時代後期から継続していると考えられる住居群を含め、前・中・後期の50軒が確認されている。奈良・平安時代には、集落規模が縮小しており、５軒の住居跡が検出されたのみであった。

次に周辺の遺跡について、新川を中心に簡単にまとめてみたい。

旧石器時代　萱田遺跡群では白幡前遺跡（26）北海道遺跡（29）坊山遺跡（31）ヲサル山遺跡（32）で多くの石器群が調査されている。萱田遺跡群から距離を隔てるが、向山遺跡（33）でも石器集中地点を確認している。新川を挟んだ対岸に位置する村上込ノ内遺跡（18）では、Ⅲ層の礫群が、沖塚遺跡（22）では、３つのブロック群を検出している。高津川流域においては、一本松前遺跡（7）、高津新山遺跡（8）で石器集中地点を検出している。

縄文時代　早期の遺跡として、大溜入遺跡（10）、二重堀遺跡（24）、ヲサル山遺跡（32）があげられ

炉穴を検出している。前期の遺構を調査した遺跡として二重堀遺跡（24)、黒沢池上遺跡･新林遺跡（25）がある。沖塚遺跡（22)、向山遺跡（33）では、前期から中期にかけての包含層が確認された。中期の住居跡として坊山遺跡（31）で１軒、ヲサル山遺跡（32）で１軒、黒沢池上・新林遺跡（25）で１軒、高津新山遺跡（8）で２軒調査されている。後期はヲサル山遺跡（32）で３軒の住居跡を検出している。

弥生時代　川崎山遺跡の南では、上ノ山遺跡（2）が調査され、弥生時代後期５軒の住居が存在した。萱田遺跡群の、白幡前遺跡（26）井戸向遺跡（28）北海道遺跡（29）権現後遺跡（30）ヲサル山遺跡（32）から後期172軒の住居跡が報告されている。後期の住居跡14軒が調査された村上込ノ内遺跡（18）の周辺でも殿内遺跡（14）浅間内遺跡（15）名主山遺跡（17）で住居跡が検出され、萱田遺跡群、村上遺跡群、川崎山遺跡をあわせ、新川中流域の集落形成の変遷を追うことができる。

古墳時代　集落としてまとまった軒数が検出されている遺跡をみてみる。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてヲサル山遺跡（32）で34軒、前期で権現後遺跡（30)32軒、中期で北海道遺跡（29)22軒、後期で内込遺跡（9)20軒の住居跡が確認されている。権現後遺跡（30）北海道遺跡（29）では石製模造品工房跡が検出されている。周辺の古墳として、上ノ山古墳群（3）において２基の円墳、箱式石棺のみの調査である堰場台古墳（6)、黒沢台古墳（21）の方墳、沖塚古墳で円墳（23）が分布している。

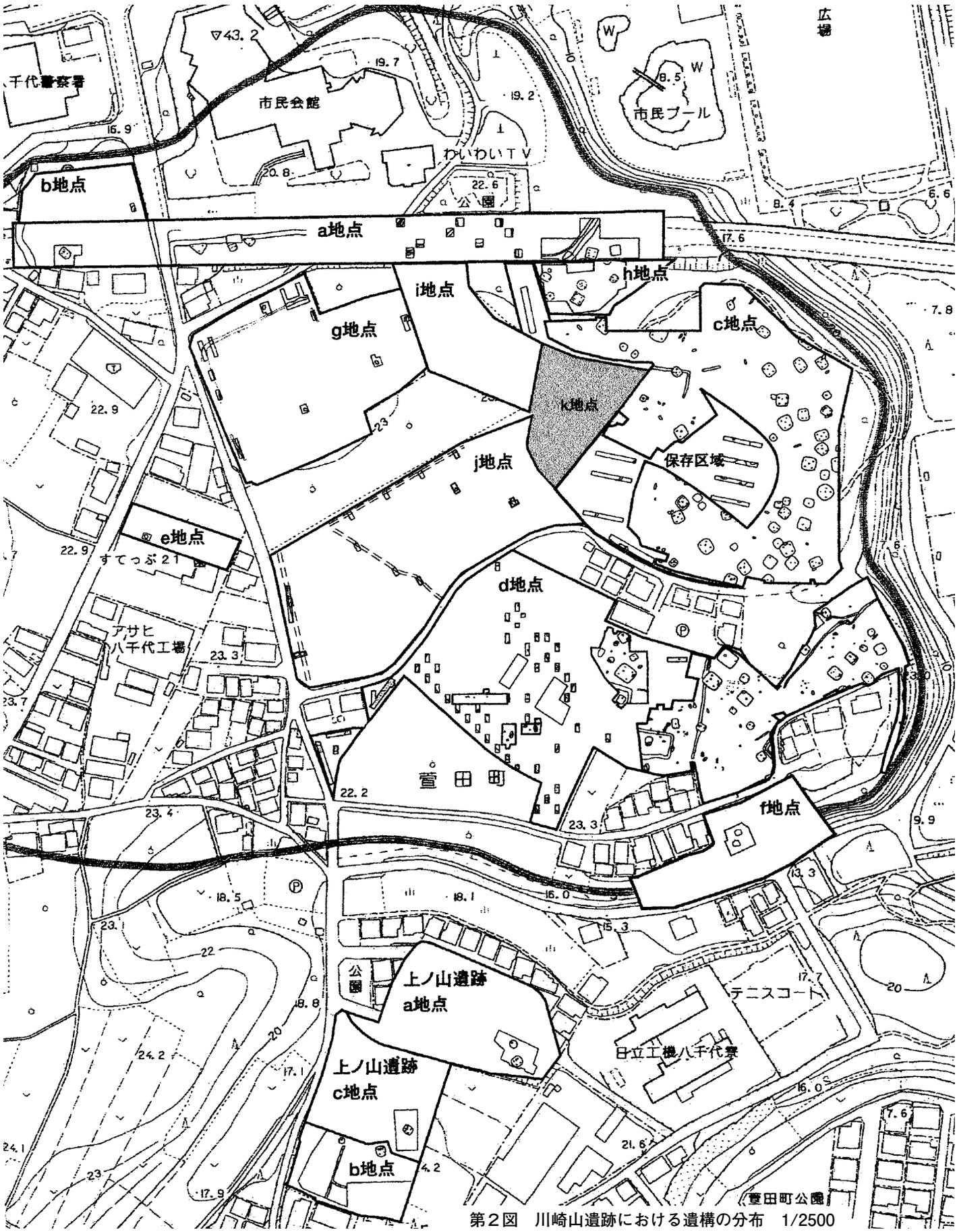
奈良・平安時代　８世紀後半から９世紀にかけて集落が大規模に形成され、新川中流域に展開する萱田遺跡群･村上遺跡群は『和名類聚抄』にある「下総國印波郡村神郷」に比定されている。多量の文字資料、仏教的遺物、生産・生活・儀礼などに関わる鉄器が出土し、竪穴住居跡以外に掘立柱建物跡・手工業生産を行った遺構が調査されている。同時代の印旛沼西部南岸には、上谷遺跡・栗谷遺跡、西部北岸には船穂白幡遺跡・鳴神山遺跡が形成され、各遺跡の分析から大規模な地域の開発の様相がうかがえる。

中世･近世　中世では、正覚院館跡（12）の調査が行われ、土塁･堀の遺構が検出され、康応２(1390)年銘の武蔵型板碑、北宋銭、陶磁器片等が出土している。中近世に構築されたと考えられる村上第１塚群（19）村上第２塚群（20）は、塚の形態・規模・盛土等に共通点はみられず、古銭・小皿・殊子玉などが出土している。遺構の性格については不明と報告されているが、村ないしは部落全体の共通目的下にあった民間信仰に関連する所産ではないかと推察している。

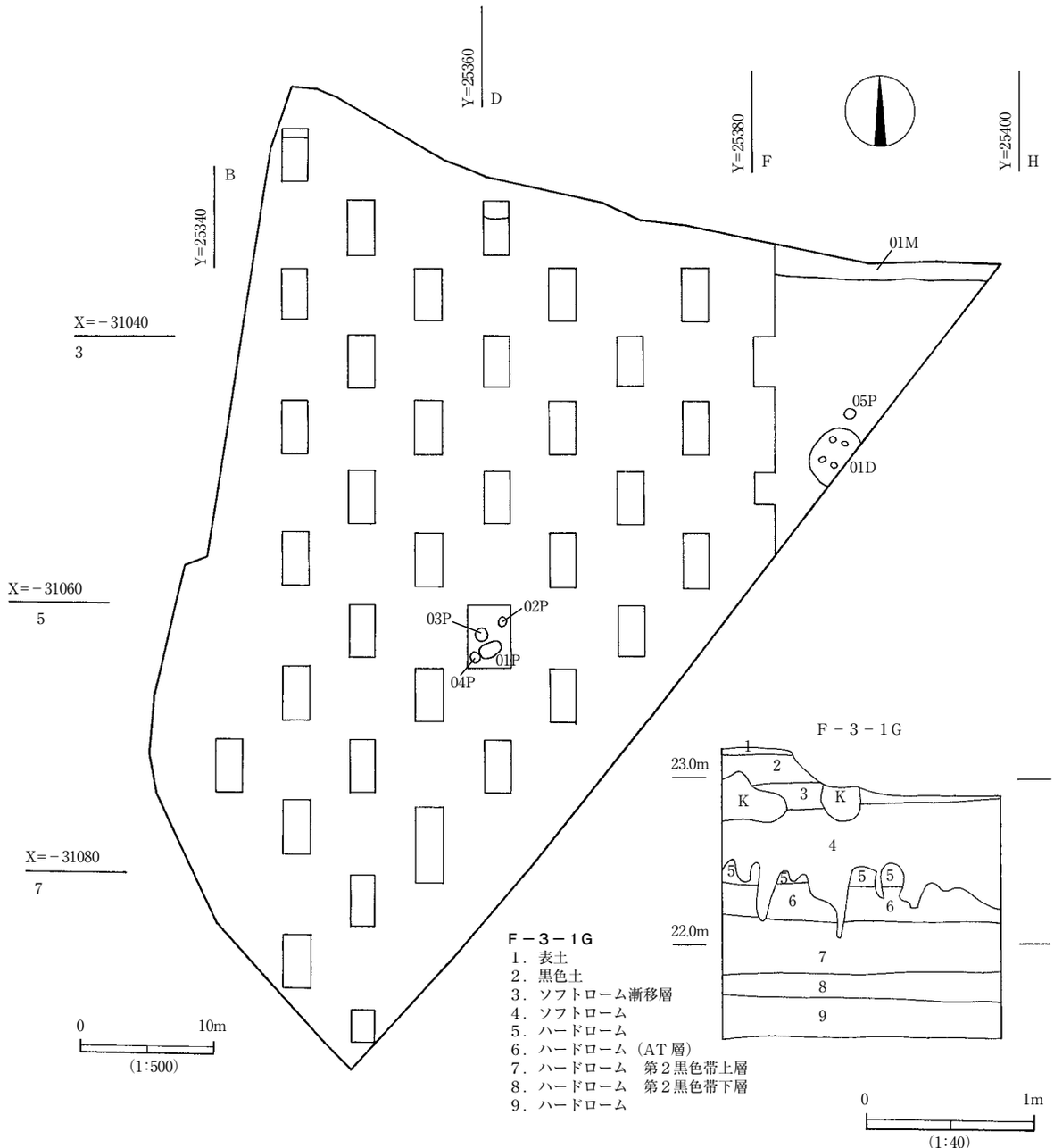
〔川崎山遺跡各地点引用文献〕

（１）　ａ地点　平岡和夫他1979『萱田町川崎山遺跡』　八千代市遺跡調査会
ｂ地点　八千代市教育委員会2002『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書１』
ｃ地点　小川和博他1999『千葉県八千代市川崎山遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書』
八千代市川崎山遺跡調査会
ｄ地点　常松成人・川口貴明2003『千葉県八千代市川崎山遺跡ｄ地点』八千代市遺跡調査会
ｅ地点　八千代市教育委員会1998『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成９年度』
ｆ地点　八千代市教育委員会1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』
ｇ地点　八千代市教育委員会1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成11年度』
ｈ地点　森竜哉2004『千葉県八千代市川崎山遺跡ｈ地点』八千代市遺跡調査会
ｉ地点　八千代市教育委員会2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』
ｊ地点　八千代市教育委員会2003『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』

（２）　武藤健一、深谷昇　2000『千葉県八千代市上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点発掘調査報告書』上ノ山遺跡調査会　八千代市遺跡調査会



第２図　川崎山遺跡における遺構の分布　1/2500



第３図　遺構配置図及び基本層序

（４）　八千代市教育委員会　2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』

（６）　秋山利光他　2002『千葉県八千代市市内出土人骨分析委託報告書　堰場台古墳　真木野古墳』八千代市教育委員会

（７）　八千代市教育委員会　2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』

（８）　朝比奈竹男他　1982『千葉県八千代市高津新山遺跡』八千代市教育委員会

（９）　森竜哉他　2001『千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

（９）　森竜哉他　2003『千葉県八千代市内込遺跡ｂ地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

(10)　関俊彦他　1982『千葉県八千代市大溜入遺跡発掘調査報告書』大溜入遺跡調査会

(12)　八千代市教育委員会　2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』

(15)　常松成人　2005『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

(16)　八千代市教育委員会　2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』

(17)（18）(19)（20）　天野努他　1974『千葉県八千代市村上遺跡群』（財）千葉県都市公社

(22)　八千代市教育委員会　2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』

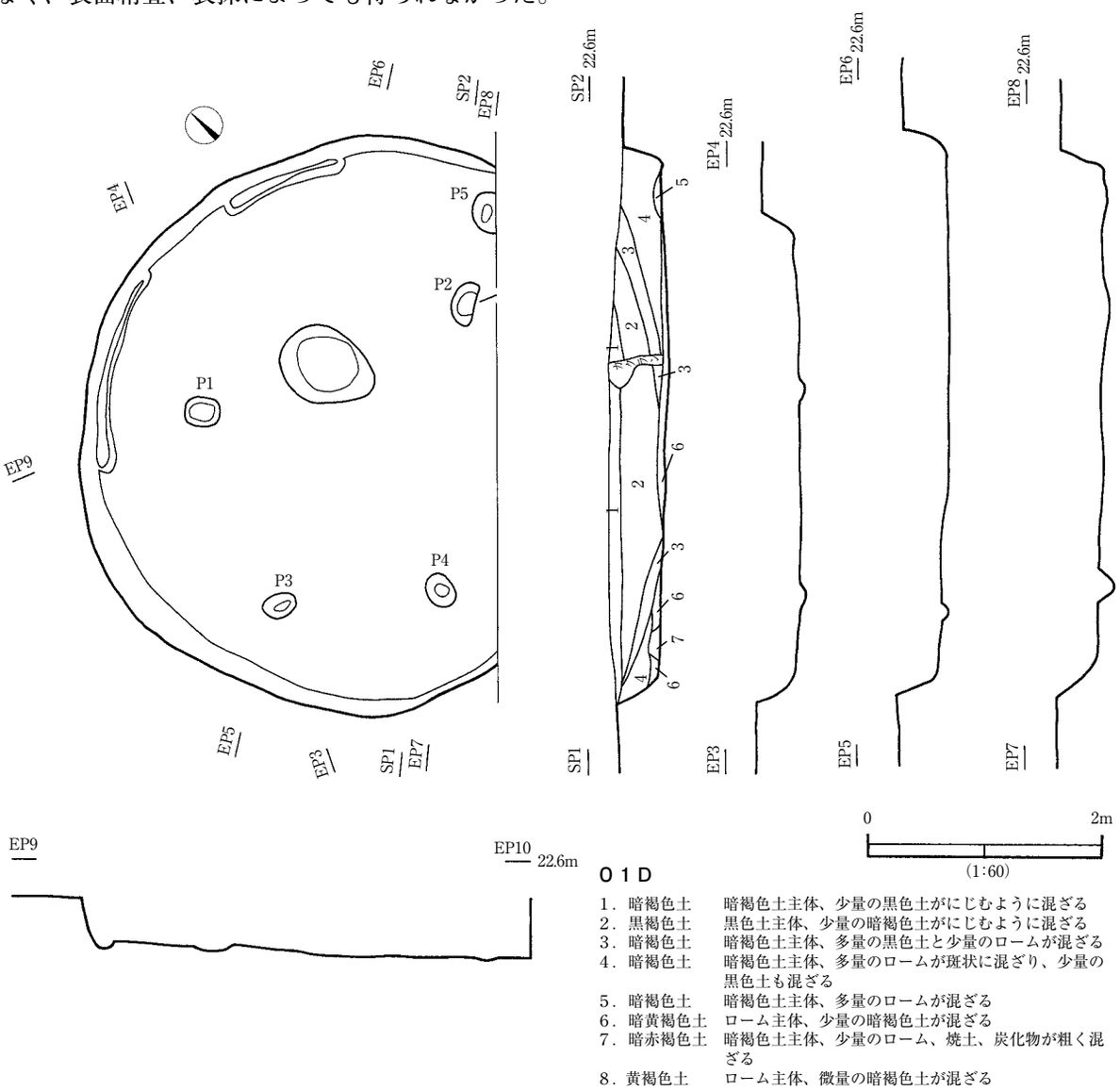
(24)　八千代市教育委員会　2005『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』

(25)　森竜哉他　2003『千葉県八千代市黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

第Ⅱ章　調査された遺構と遺物

第１節　弥生時代

川崎山ｋ地点で調査された弥生時代の遺構は、後期の竪穴住居跡１軒であった。遺物は、遺構出土はなく、表面精査、表採によっても得られなかった。



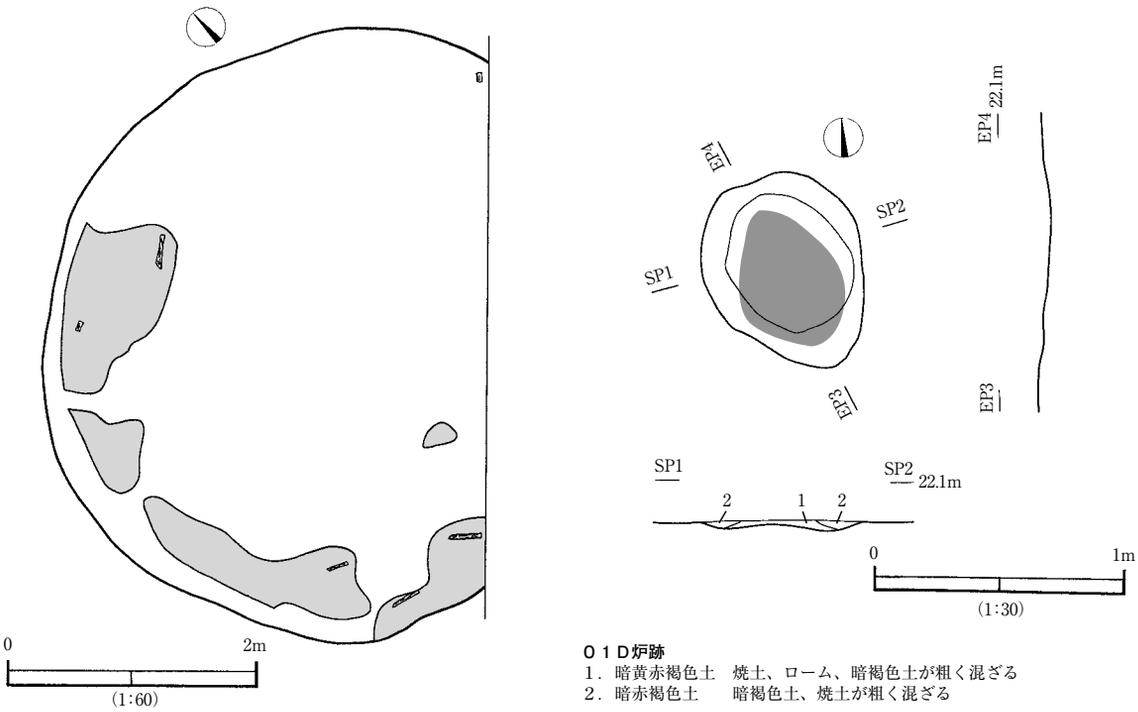
第４図　０１Ｄ

０１Ｄ　（第４図、５図）

位　置　　F-３-G 周辺の遺構として05P、01M がある。遺構は、調査区域外にも広がり全体の2/3を調査した。

遺　構　　不整形な隅丸方形。主軸方位N-40°-E　規模4.9×3.4m（現存最大）深さ0.5m。床面の大部分は、踏み固めたソフトロームで、平坦である。壁面は、やや緩やかに立ち上がる。部分的に、深さ５～６㎝の周溝が認められた。住居跡南西部には微小な炭化物を多く含む焼土が広がる。

ピット　　Ｐ１～Ｐ５で、直径0.3～0.4m、深さは0.07～0.15mを測る。柱穴と想定できるＰ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５の覆土は、暗褐色土に少量の黒色土が混ざり、Ｐ４には少量の焼土が混ざる。出入り口部施設に関連するＰ５には、暗褐色土に少量のロームが混ざる。柱穴の配置は均整のとれた



第５図　０１Ｄ焼土・炉跡

ものでなく、形態は、しっかりとした掘り方を持たない。

炉　　規模0.8×0.6m、深さ５cm を測る。中央やや北よりに位置し、不整形な楕円形で浅く掘り窪んである。炉は床面を直接掘り込んで作られ、炉中心の覆土は焼土、ローム、暗褐色土が強くしまり、被熱状況は良好である。

覆　土　　８層に分層可能で、暗褐色土が主体である。第７層の焼土、炭化物から住居廃絶時に人為的な埋め戻しが行われ、その後、比較的早い自然堆積により埋没した過程が土層観察から判明した。住居跡南西部壁際では、覆土下層で微小な炭化物を多く含む焼土が広がっていた。

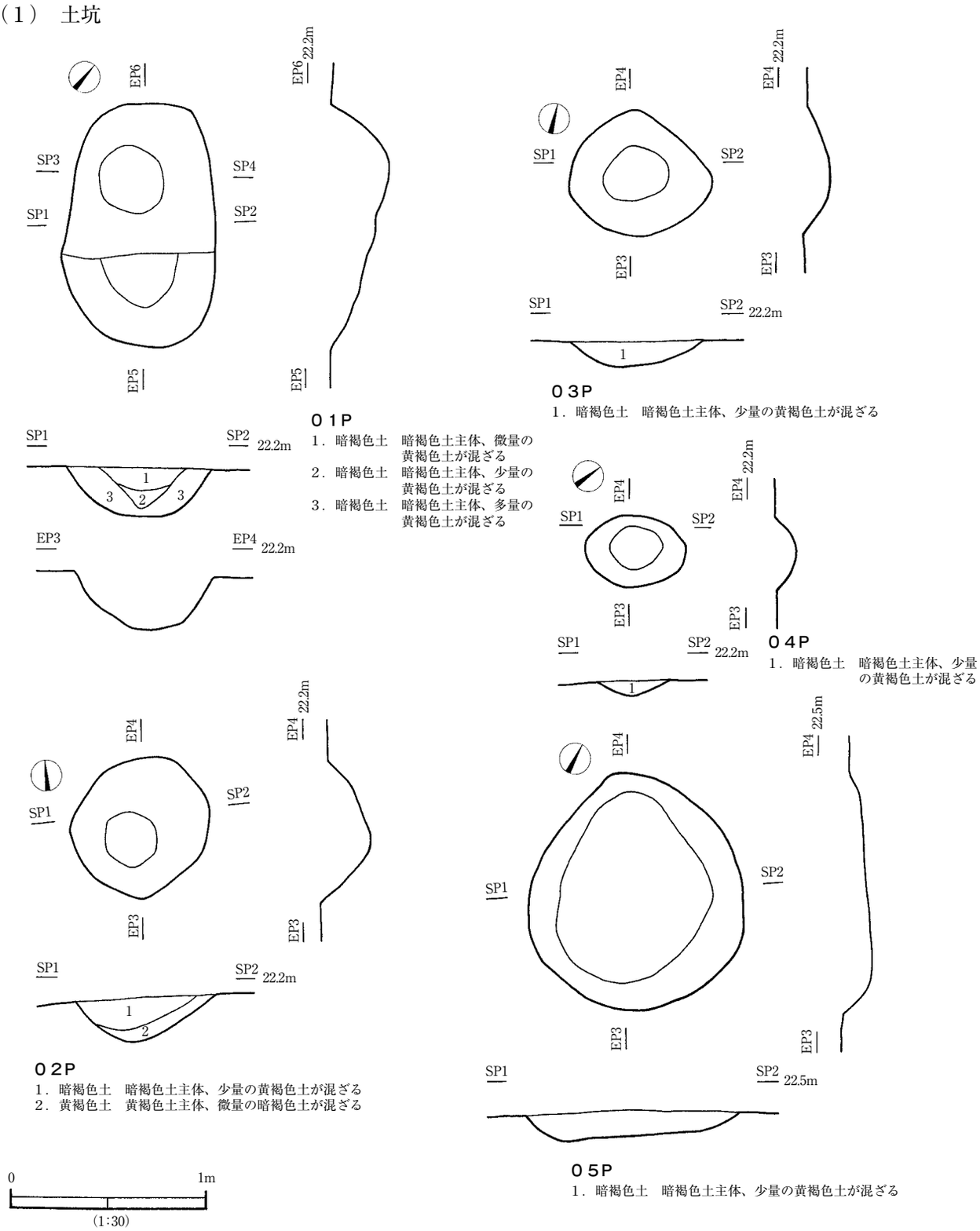
遺　物　　遺物は出土しなかった。

所　見　　遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の形態、遺構の規模、隣接した調査区の遺構分布状況等から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

第２節　時期不明

川崎山ｋ地点では、弥生時代住居跡の他に、土抗５基、溝１条が調査され、遺構に伴う遺物は、溝覆土から土師器細片が出土したのみであった。

（1）　土坑



第6図　01P・02P・03P・04P・05P

０１Ｐ　（第６図）

位　置　D-５-G　周辺の遺構として02P、03P、04P がある。

遺　構　平面は長楕円形。主軸方位　N-45°-W　規模　1.25×0.76m　深さ0.3m。壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面は北側が深く、南側で浅い。

覆　土　暗褐色土主体。３層に分層され、自然堆積による埋没が想定できる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

所　見　遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の形態、規模から縄文時代の土坑と思われる。

０２Ｐ　（第６図）

位　置　D-５-G 周辺の遺構として01P、03P、04P がある。

遺　構　平面は不整円形。主軸方位　N-５°-E　規模　0.72×0.71m　深さ0.22m。壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面は擂り鉢状である。

覆　土　暗褐色土主体。２層に分層され、自然堆積による埋没が想定できる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

所　見　遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の形態、規模から縄文時代の土坑と思われる。

０３Ｐ　（第６図）

位　置　C-５-G　周辺の遺構として01P、02P、04P がある。

遺　構　平面は不整円形。主軸方位　N-10°-W　規模　0.74×0.65m　深さ0.12m。壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面は擂り鉢状である。

覆　土　暗褐色土主体。２層に分層され、自然堆積による埋没が想定できる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

所　見　遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の形態、規模から縄文時代の土坑と思われる。

０４Ｐ　（第６図）

位　置　C－５-G　周辺の遺構として01P、02P、03P がある。

遺　構　平面は長楕円形。主軸方位　N-42°-E　規模　0.53×0.32m　深さ0.10m。壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面は擂り鉢状である。

覆　土　暗褐色土主体。１層に分層され、自然堆積による埋没が想定できる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

所　見　遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の形態、規模から縄文時代の土坑と思われる。

０５Ｐ　（第６図）

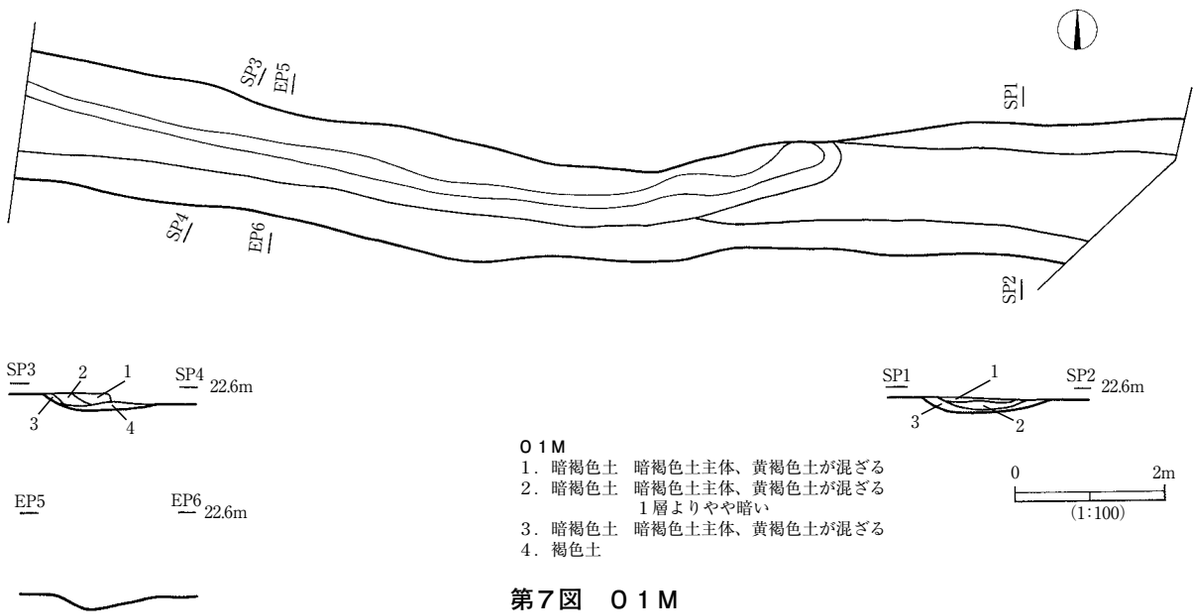
位　置　F－３-G　周辺の遺構として01D、01M がある。

遺　構　平面は不整円形。主軸方位　N-22°-W　規模　1.21×1.1m　深さ0.15m。壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。

覆　土　暗褐色土主体。１層に分層され、自然堆積による埋没が想定できる。

遺　物　遺物は出土しなかった。

所　見　遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の形態、規模から縄文時代の土坑と思われる。



第７図　０１Ｍ

（２）溝状遺構

０１Ｍ　（第７図）

位　置　D-２-G、F-２-G、G-２-G　東側は調査区域外にのびる。周辺の遺構として01D、05P がある。

遺　構　断面は皿状。主軸方位　N-97°-E　長さ　16m 以上　幅　1.31～1.6m　深さ0.15m。壁面はやや角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。土層断面では、明確な作り変えは、確認できなかったが、遺構平面形態から大きい溝の中に新たに小さい溝が作られていたのが判明した。D-２-G では焼土の塊が、F-２-G では、溝覆土下層に焼土が薄く広がっていた。

覆　土　暗褐色土主体。4 層に分層され、自然堆積による埋没が想定できる。

遺　物　遺物は土師器細片が、覆土から出土した。

所　見　遺物は出土したものの遺構に伴うものではなく、覆土の観察、遺構の形態、規模から近世の区画溝と思われる。

第Ⅲ節　調査の成果と課題

今回の調査では、弥生時代後期の住居跡１軒、時期不明の土坑５基・溝状遺構１条を検出した。出土遺物は、表採と溝覆土から、図示できない土師器片が得られた。

川崎山遺跡では､10地点において調査が実施され、遺構の分布状況が明瞭に把握できる。川崎山遺跡は、旧石器時代から奈良・平安時代まで長期にわたり集落が存続していた様相が明らかとなり、なかでも、弥生時代後期では37軒、弥生時代終末から古墳時代にかけて50軒の竪穴住居跡が検出された。ｋ地点に関連するｃ・ｄ・ｈ地点の調査成果をあわせ簡単にまとめたい。

01Ｄは、時期を決める遺物の出土はなかったが、遺構の形態、規模、覆土等の特徴から弥生時代後期の住居跡として判断した。規模は、長軸方向4.9m を測り、柱穴と出入り部に関連するピットが確認できた。柱穴の配置は不均等で、Ｐ２とＰ５の中間に炉が位置する。ｋ地点で検出された住居跡は、ｃ地点北側で検出された弥生時代後期の住居群のまとまりに属すると想定され、ｋ地点から西側の台地中央部に遺構は見られない。

調査の結果から、遺物の出土が見られない点は注目されよう。また01Ｄの土層断面より､７層を埋め戻し、覆土下層から微小な炭化物を含む、にじむような焼土が確認された。にじむような焼土は、住居壁際から検出されており、形として残る炭化物は、非常に少ない。以上のことをふまえると住居廃絶時に、住居を構成した主要な部材・使用していた土器等をほとんど持ち去り、廃棄するものをその場で焼却したことが見て取れる。

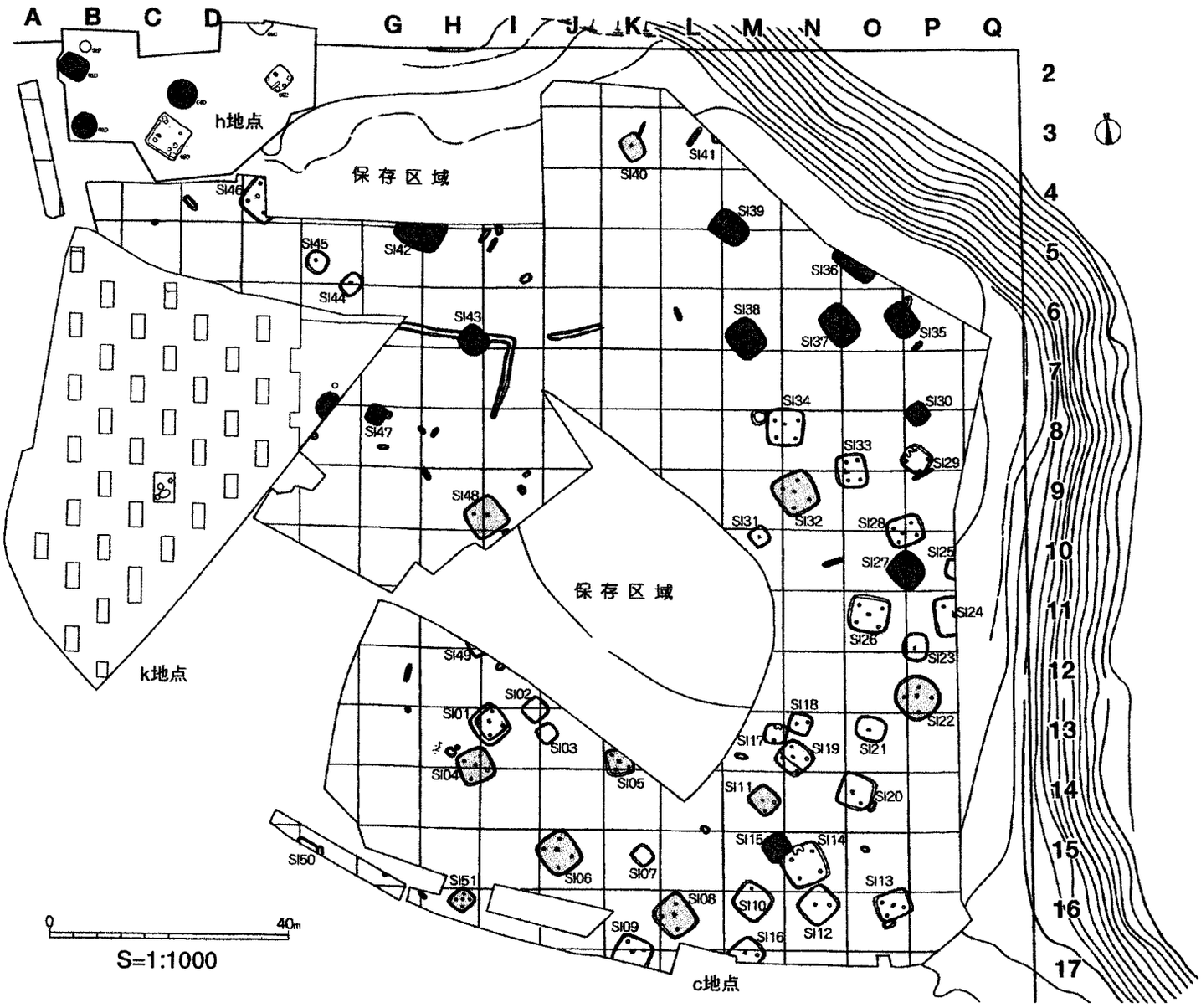
弥生時代後期のなかで、ｋ地点の住居跡に似ているものとして、ｈ地点の01Ｄが挙げられる。床面で少量の遺物が出土し、壁際を巡るように炭化物が検出され、炭化材として形になるものは少ない。焼失家屋とは考えられず、廃棄するものをその場で焼却した状況はｋ地点と同様であろう。ｈ・ｋ地点の住居跡には、埋没過程で土器が廃棄されない点も指摘できる。

ｋ地点には、隣接しないもののｄ地点においても、弥生時代後期の住居跡５軒が検出されているが、ｋ地点と同様の住居跡は見られない。

川崎山遺跡の弥生時代後期住居跡は、崖線に沿うように立地し、ｋ地点の住居跡は住居空間の西の境界を示すことが明らかとなった。

時期不明とした土坑５基については、遺物の出土がなく、調査担当者の所見から縄文時代の遺構の可能性が高い。溝状遺構は、ｃ地点調査区中央から続く遺構であり、土地を区画する機能が考えられる。

川崎山遺跡の南には、上ノ山遺跡が所在し、弥生時代後期の住居跡５軒が調査されている。川崎山遺跡・上ノ山遺跡の調査事例を詳細に検討することにより、当該期の住居の変遷が解明されるだろう。



第８図　川崎山遺跡・Ｋ地点周辺遺構配置図

PL1

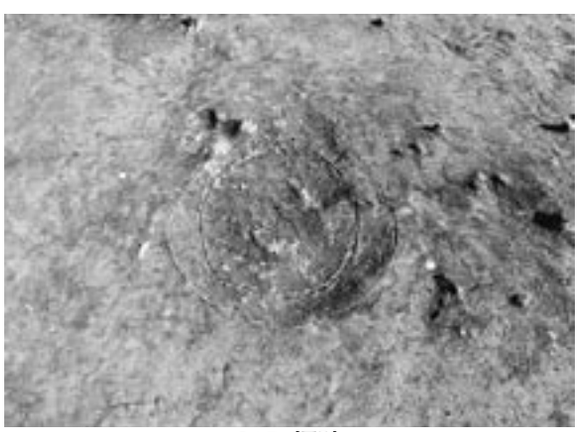
完掘状況

完掘状況

基本層序

01D

01D セクション


01D 炉跡

01D 炭化物検出状況

調査風景

01P

02P

03P

04P

05P

01M セクション

01M

調査風景

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ちばけん　やちよし　かわさきやまいせきけーちてん
書　　名	千葉県八千代市　　川崎山遺跡ｋ地点
編 著 者 名	伊藤弘一　宮澤久史
編 集 機 関	八千代市遺跡調査会
所　在　地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　　TEL.047（481）0304
発行年月日	西暦　2006年　（平成18年）　10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわさきやまいせきけいちてん 川崎山遺跡ｋ地点	やちよしかやだあざかわさきやま 八千代市萱田字川崎山 742番　1,3,8	12221	241	35度 43分 11秒	140度 06分 50秒	20060410 ～ 20060508	上層 170m^2	宅地造成

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川崎山遺跡ｋ地点	集落地	弥生時代	竪穴住居跡　　1軒	弥生土器	
	包蔵地	時期不明	土坑　　5基		
		時期不明	溝　　1条	奈良・平安時代土師器	

千葉県八千代市

川崎山遺跡ｋ地点

－宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２００６（平成１８年）

印刷日　2006年10月18日
発行日　2006年10月31日
編　集　八千代市遺跡調査会
〒276-0045　八千代市大和田138-2
TEL　047（481）0304
発　行　協和不動産株式会社